



プログラミング教育

中京テレビ放送株式会社

代表取締役社長 小松 伸生

ICTの波は産業界を覆い、人々の生活スタイルを変容させ、今や教育の現場にも大きな変化を及ぼそうとしています。2020年から小学校でも「プログラミング」が必修となることが決まったからでしょうか、我が家の郵便受けにも「子供向けプログラミング教室」の広告チラシが目立つようになりました。

時代の変化に対応して教育方法も変わるのは当然ですし、コンピュータを使い問題解決を図る論理性を身に着けることも必要でしょう。しかし、少し心配も生まれます。こうした教育を経てどのような人物が育つのか、極端に内にこもる自己完結型の人物が増えないだろうか。プログラミング教育が目指すものがそのようなものでないことは明白ですが、結果は別です。

しかし、こうした危惧は杞憂に過ぎないかもしれないと思える出来事にも遭遇しました。それは昨年中京テレビとして初めて開催したハッカソンを通してです。参加者は提示されたテーマを基に会場で会った人々に声をかけ、チームを編成しICTを使ってアイデアを実現するというルールです。私は、ICTを好む人はもっと自分の領域に閉じこもるのではないかと、あまり参加者は多くはないのではないかと予想していましたが、これは間違いでした。多くの若い参加者がこの場所に来てお互いのアイデアを示し合い、初めての相手に一緒にやってみないかと声をかけ、議論沸騰して試行錯誤を続け、そしてゴールにたどり着く。結果として出てきたアイデアもユニークで面白かったのですが、参加者の楽しそうな姿、即席のチームの仲の良さが意外であり気持ちが良いものでした。そして審査員でもあるITベンチャーを経営する方の言葉が心に残りました。

「この世界では、結局はコミュニケーション能力の高い人がITスキルも高いんです」

プログラミング教育は、やり方によって子供たちのコミュニケーション能力を高めるための機会となる可能性は十分にあるのだと思います。文部科学省のプログラミング教育を目指す趣旨の中にもこんな記述があります。

「多様な他者と協働して新たな価値を創造していくための力が求められる」

教育現場では是非この点を忘れずに実践してほしいと願わずにはられません。